

令和4年度
サーキュラーエコノミーの実現に向けたモデル事業

オフィスビル向け弁当、ドリンク販売でのリユース
容器使用による資源循環実証事業
実施報告書

株式会社 Circlloop

■目次

| | |
|----------------|----|
| 1. 背景..... | 3 |
| 2. 目的..... | 3 |
| 3. 実施体制..... | 4 |
| 4. 事業内容..... | 4 |
| 1. 事業の全体像 | |
| 2. 使用したリユース容器 | |
| 3. 容器を管理するシステム | |
| 4. 各実証領域の実施内容 | |
| 5. 本事業の結果..... | 12 |
| 1. 利用データ | |
| 2. 運用の検証 | |
| 3. ユーザアンケート | |
| 4. ユーザインタビュー | |
| 6. まとめ..... | 20 |
| 7. 今後に向けて..... | 20 |

1. 背景

2019年(令和元年)5月に「プラスチック資源循環戦略」が策定され、2022年(令和4年)4月に「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律(プラスチック資源循環促進法)」が施行されるなど、日本においてもプラスチックを含む資源循環の動きが加速してきている。

一方で、日常生活に目を落とすと、資源循環の取り組みは十分ではなく、特に飲食業界はテイクアウトやデリバリで多くの使い捨て容器を使用している。そして、オフィスビルはランチ時間帯のお弁当需要や一日を通してのコーヒー需要が高い場所だが、飲食後の容器がきちんと分別されないまま廃棄されており(画像1)、資源循環を阻害している。

画像1: 港区のオフィスビルの平日午後1時頃のゴミ箱の様子
(分別が不徹底なまま弁当ゴミがゴミ箱からあふれている状況)



2. 目的

本事業では、東京都内のオフィスビルで、使い捨て容器ではなく繰り返し使えるリユース容器での弁当、ドリンク販売を行い、オフィスからの使い捨て容器廃棄量の削減、資源循環の確立を目指す。

3. 実施体制

本実証事業の体制を以下に示す。(図1)

図1：体制図



4. 事業内容

1. 事業の全体像

実証領域を、オフィスを取り巻く利用シーンとそこで活用する容器の組み合わせで4つに分類した。本事業では各領域について実証を行った。(図2)

利用シーン：「日常利用」、「イベント利用」

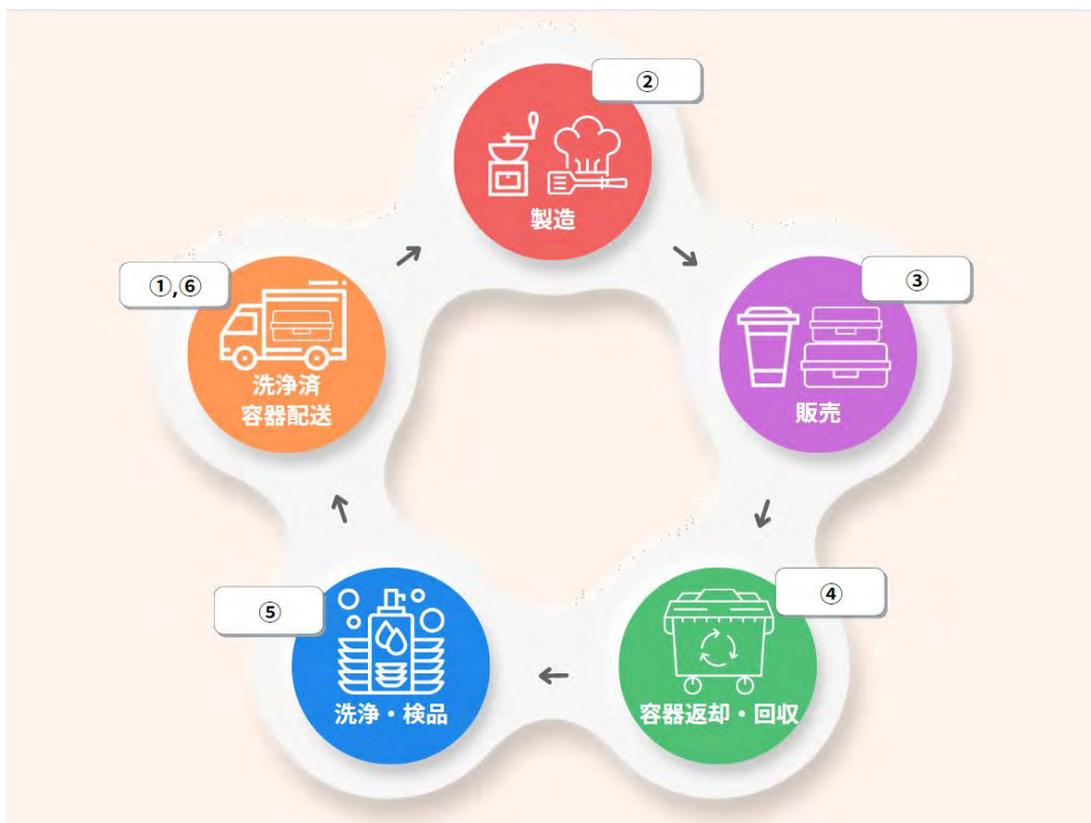
活用する容器：「リユース弁当容器(食事需要)」、「リユースカップ(ドリンク需要)」

図2：本事業が取り組む実証領域



事業の流れは図 3 の通り。

図 3：事業の流れ



- ①洗済済容器配送：Circloop(本事業主体)が洗済・検品済みの清潔な容器を弁当、ドリンク製造を行う飲食店に配送
- ②製造：飲食店がリユース容器を使用して弁当、ドリンクを製造
- ③販売：飲食店が弁当、ドリンクを販売
- ④容器返却・回収：利用者が飲食後、回収ボックスに容器返却、Circloopが容器を回収
- ⑤洗済・検品：Circloopが洗済・検品を実施
- ⑥洗済済容器配送：再びCircloopが飲食店に清潔な容器を配送

2. 使用したリユース容器

今回の実証事業ではリユース弁当容器 3 種類とリユースカップ 1 種類(図 4)を用意した。リユース弁当容器の 3 種類のうち 2 種類はお弁当販売で利用するため、密閉性を重視した構造のものを採用した。残りの 1 種類はケータリング利用のため、中身の詰めやすさと持ち運びやすさを重視したものを採用した。

リユースカップについては中身が入った状態でオフィスのフロアを移動することを想定し、密閉性の高い構造のものを採用した。

図 4：使用したリユース容器

| | |
|--|--|
| <p>リユース弁当容器 1：お弁当箱型 (密閉性重視)</p> |  |
| <p>リユース弁当容器 2：ボウル型(密閉性重視)</p> |  |
| <p>リユース弁当容器 3：お弁当箱型 (詰めやすさ、持ち運び重視)</p> |  |
| <p>リユースカップ</p> |  |

3. 容器を管理するシステム

今回の実証事業では容器の貸し出し、返却を管理するためのシステムを構築した。容器の貸し出し手続きはお弁当やコーヒーを購入するユーザに実施してもらうため、LINEを活用したアプリケーションを開発した。返却については、ユーザの手間を増やさないように、管理者(実証事業者)側が返却登録を実施できるアプリケーションを開発した。ユーザ向けアプリケーションの画面を図5、管理者向けアプリケーションの画面を図6に示す。

図5：ユーザ向けアプリケーション

・友だち追加



・容器を借りる

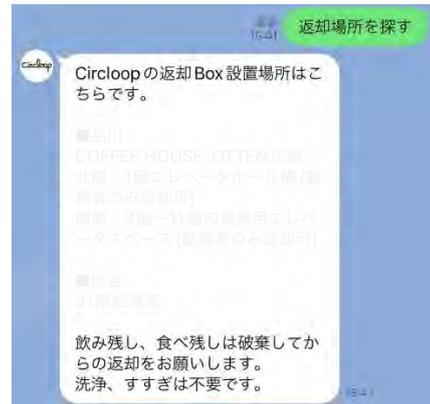
容器に貼っているコードをスマートフォンのカメラで読み込むことで容器を借りることができる。

容器を借りる



・返却場所確認

LINE リッチメニューの「返却場所を探す」ボタンを押すと、返却場所を確認することができる。



・環境貢献量の可視化

「容器貸し出し完了」時とリッチメニューの「みんなで減らした使い捨て容器」のボタンを押した時に使い捨て容器削減回数を表示。環境貢献量を個人単位とサービス全体で確認することができる。



図6：管理者向けアプリケーション

・容器一覧

リユース容器をユニークなIDで管理している。容器が破損した場合など、状態を変更することでユーザが容器のコードを読み取った際に利用できないようアラートを表示させることが可能となっている。

| | A | B | C |
|----|-----------|----|---|
| 1 | 容器ID | 状態 | |
| 2 | CL-A-0001 | | |
| 3 | CL-A-0002 | | |
| 4 | CL-A-0003 | | |
| 5 | CL-A-0004 | | |
| 6 | CL-A-0005 | 破損 | |
| 7 | CL-A-0006 | | |
| 8 | CL-A-0007 | | |
| 9 | CL-A-0008 | | |
| 10 | CL-A-0009 | | |

・容器利用履歴

ユーザが容器を利用中か、返却済かを履歴管理している。容器回収後、容器管理者が返却登録を行うことで「ステータス」が「利用中」から「返却済」に遷移する。

| | A | B | D | E | F | G |
|----|-----------|-------|-------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1 | 容器ID | 利用者ID | ステータス | 貸出日時 | 返却期限 | 返却日時 |
| 20 | CL-C-0005 | xxxx | 返却済 | 2022/11/09 1:17:48 | 2022/11/12 23:59:59 | 2022/11/09 1:18:46 |
| 21 | CL-C-0002 | xxxx | 返却済 | 2022/11/09 1:18:18 | 2022/11/12 23:59:59 | 2022/11/09 1:18:38 |
| 22 | CL-B-0006 | xxxx | 返却済 | 2022/11/09 14:06:33 | 2022/11/12 23:59:59 | 2022/11/10 13:26:00 |
| 23 | CL-C-0001 | xxxx | 返却済 | 2022/11/09 14:30:58 | 2022/11/12 23:59:59 | 2023/01/24 14:58:15 |
| 24 | CL-A-0099 | xxxx | 返却済 | 2022/11/10 13:29:45 | 2022/11/13 23:59:59 | 2022/12/05 14:00:36 |
| 25 | CL-C-0030 | xxxx | 返却済 | 2022/11/22 11:50:59 | 2022/11/25 23:59:59 | 2022/12/05 14:00:59 |
| 26 | CL-B-0012 | xxxx | 返却済 | 2022/11/22 11:54:28 | 2022/11/25 23:59:59 | 2022/12/05 14:01:20 |
| 27 | CL-C-0028 | xxxx | 返却済 | 2022/12/08 13:19:40 | 2022/12/11 23:59:59 | 2023/01/24 14:57:55 |
| 28 | CL-A-0117 | xxxx | 返却済 | 2022/12/27 11:04:07 | 2022/12/30 23:59:59 | 2023/01/24 14:57:27 |
| 29 | CL-A-0117 | xxxx | 利用中 | 2023/01/24 16:21:03 | 2023/01/27 23:59:59 | |
| 30 | CL-A-0115 | xxxx | 利用中 | 2023/01/26 18:53:56 | 2023/01/29 23:59:59 | |
| 31 | | | | | | |

・返却登録

管理者のスマートフォンで容器返却登録用のアプリケーションを起動。返却された容器のコードを読み取ることで、返却情報がデータベースに登録される。



4. 各実証領域の実施内容

前掲の4つの実証領域の実施内容を以下に示す。

実証領域1：「日常利用」×「食事需要」

| | |
|-------------|---|
| 実証期間 | 2022年11月21日～12月2日の平日9日間 |
| 実証場所 | 渋谷ヒカリエ 31階 株式会社 ARISE Analytics 社オフィス |
| 実証内容 | お昼時間帯のお弁当販売をリユース容器で実施 オフィス勤務者が購入し、食べ終わったら所定の返却場所に容器を返却 |
| 利用した容器 |  |
| 容器の返却場所 | 31階オフィス給湯室に返却用のボックスを設置、毎日容器を回収 |
| 容器管理システムの利用 | 利用有り。オフィス勤務者がお弁当購入後、自席に持ち帰るため返却状況の管理が必要 |

実証領域 2 : 「日常利用」 × 「ドリンク需要」

| | |
|-------------|---|
| 実証期間 | 2022 年 11 月 14 日～12 月 9 日の平日 19 日間 |
| 実証場所 | COFFEE STAND . OTTEN(港区港南) 11 階建てオフィスビルの 1 階で営業されているカフェ店舗 |
| 実証内容 | コーヒー、カフェラテを対象にリユースカップと使い捨てカップを購入者が選択できる形で実証実施 リユースカップでの購入者は飲み終わったら、所定の返却場所に容器を返却 |
| 利用した容器 |  |
| 容器の返却場所 | 店舗とオフィスビルの各執務フロア(3 階～11 階)に返却用のボックスを設置、毎日容器を回収 |
| 容器管理システムの利用 | 利用有り。オフィス勤務者が購入後、自席にカップを持ち帰るため返却状況の管理が必要 |

実証領域 3 : 「イベント利用」 × 「食事需要」

| | |
|-------------|--|
| 実証期間 | 2022 年 12 月 16 日 |
| 実証場所 | オフィス内セミナールーム (決起イベント会場) |
| 実証内容 | 決起イベントのケータリングフードをリユース容器で提供、イベント参加者は食べ終わった後に容器を返却 |
| 利用した容器 |  |
| 容器の返却場所 | イベント会場内に返却ボックスを設置 |
| 容器管理システムの利用 | 利用なし。食事がイベント会場内に限定されており、容器の回収状況をシステム管理する必要がないため |

実証領域 4: 「イベント利用」 × 「ドリンク需要」

| | |
|-------------|--|
| 実証期間 | 2023年2月25日 |
| 実証場所 | 新宿中央公園 |
| 実証内容 | 企業主催の屋外イベントで参加者向けにドリンクをリユースカップで提供 イベント参加者は飲み終わった後に容器を返却 |
| 利用した容器 |  |
| 容器の返却場所 | イベント会場内に返却ボックスを設置 |
| 容器管理システムの利用 | 利用なし。飲用されるのがイベント会場内に限定されており、容器の回収状況をシステム管理する必要がないため |

5. 本事業の結果

1. 利用データ

① 利用回数

| 日常利用 | | イベント利用 | |
|----------|----------|--------|--------|
| 食事需要 | ドリンク需要 | 食事需要 | ドリンク需要 |
| 9日間 | 19日間 | 1日 | 1日 |
| 84回(41名) | 94回(34名) | 80回 | 60回 |

本事業を通じて合計 318 回分のリユース容器利用＝使い捨て容器の削減となった。「日常利用」のケースでは同一ユーザが複数回リユース容器を使うことがあるため、人数ベースでは 215 名のリユース容器利用となった。

② リピート利用の状況

リユースカップと使い捨てカップを選択できる状況での実証である「日常利用×ドリンク需要」のケースにおいて、利用者のリピート状況を分析した。

| | |
|--------------|--------------|
| 利用者数 | 34人 |
| 初回のみ | 22人 |
| リピート有 | 12人 |
| リピート率 | 35.3% |

| 利用者ID | 貸出日時 | | | | | | | | | | | | | | | | | 総計 | |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|----|-------|
| | 11月14日 | 11月15日 | 11月16日 | 11月17日 | 11月18日 | 11月21日 | 11月22日 | 11月24日 | 11月25日 | 11月28日 | 11月29日 | 11月30日 | 12月1日 | 12月2日 | 12月5日 | 12月6日 | 12月7日 | | 12月9日 |
| 利用者1 | | 1 | 2 | 1 | 2 | 2 | | | | 2 | 2 | 1 | 2 | | 1 | | | 1 | 17 |
| 利用者2 | | | | | | 1 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 10 |
| 利用者3 | | | 1 | | | 1 | 1 | | | 3 | | | | | 1 | | | | 8 |
| 利用者4 | 1 | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | 1 | | | 1 | | 1 | 8 |
| 利用者5 | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | 8 |
| 利用者6 | | | | 1 | | | | 1 | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | 9 |
| 利用者7 | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | 1 | 4 |
| 利用者8 | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | 3 |
| 利用者9 | | 1 | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | 3 |
| 利用者10 | | | | | 2 | | | | | | | 1 | | | | | | | 3 |
| 利用者11 | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 利用者12 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | 2 |

実証期間中にリユースカップを利用したユーザのリユースカップリピート利用率は35.3%となった。リピート利用のあった12名について、リピート回数を見たところ、最もリピート回数が多いユーザでは17回の利用となった。朝の出勤時とランチで外出後の帰社時など1日2回のコーヒー飲用が定着していると考えられ、コーヒーを飲む習慣にリユースカップ利用を重ねることができれば、使い捨て容器削減に大きく貢献することが示唆された。

また、実証期間中は出社とリモートワークが併用されていたこともあり、4回以上のリピートユーザに関しては、出社時はコーヒーを買う習慣があり、その習慣にリユースカップ利用を重ねることができたと考えられる。

③ 容器返却の状況

イベント利用においてはその場で容器返却が行われるため、日常利用のケースにおいて、容器の返却率を検証した。

| 日常利用 | |
|----------|----------|
| 食事需要 | ドリンク需要 |
| 9日間 | 19日間 |
| 返却率 100% | 返却率 100% |

食事需要、ドリンク需要共に容器の返却率は100%となった。かつ、容器の返却期限を貸出手続き後3日と設定していたが、すべての容器が3日以内に返却された。ほぼすべての容器が利用された当日には返却されており、オフィスというある程度閉鎖された空間の場合、容器を持ち帰ったり、放置したりすることなく、退社前に返却する行動が取られたと考えられる。

ドリンク需要を検証した「COFFEE STAND .OTTEN」が入居しているオフィスビルでは執務室に個人用のロッカーが設置されていないため、利用したその日のうちに返却する行動がより促進されたと考えられる。

2. 運用の検証

① 返却された容器の回収

「日常利用×ドリンク需要」のケースを検証したオフィスビルでは3階～11階の各フロアに返却ボックス(図7)を設置し、オフィス勤務者が自分の執務フロアで容器を返却できる利便性を提供した。ドリンクを販売しているカフェにも返却ボックスを設置したが、実証期間が後半に入るにつれて、各フロアでの回収数が増えたことから、「容器返却の利便性」はサービスの拡大に向けて重要な要素の一つであると考えられる。

図7：返却ボックスとリユースカップが返却されている様子



一点、課題としては返却ボックスが普通のごみ箱と誤認され、使い捨ての紙カップやそのほかのごみが投入されるケースが散見された(図8)。特に実証開始直後はごみ投入されることが多かったが、返却ボックスの表示を改善することで、ごみの投入を無くすことができた。商用展開時は返却ボックスのデザインをごみ箱と混同されないようにしていくことが重要と考えている。

図8：ごみが投入されている様子と返却ボックスの表示改善



② 返却された容器の洗浄

「日常利用」のケースでは毎日の容器回収後、食器用洗剤を使用して容器を軽く洗浄(予備洗浄)し、週1回まとめて業務用食洗機で洗浄するオペレーションを構築した。また、洗浄後に洗浄済み容器をサンプリングし、でんぷん、タンパク質、脂質、洗剤の残留チェックを試薬を用いて行った。残留チェックでは各種成分は検出されず、業務用食洗機での洗浄で十分な洗浄品質を担保することができた。(図9)

図9：回収時～予備洗浄後～洗浄後の容器

回収時点の容器



業務用食洗機での洗浄後



予備洗浄実施後



参考：試薬での検査(残留タンパク)
残留がある場合、青で着色される



商用化に向けては、より高い洗浄品質を担保できるよう、洗浄マニュアルの整備やATP検査の導入など検討していきたい。

「イベント利用」のケースではイベント利用の当日、もしくは翌日に業務用食洗機での洗浄を実施した。こちらのケースでも残留チェックを実施し、問題なく洗浄できていることを確認した。

イベント利用の際のドリンクはスパイスを使用したチャイを提供した。イベント前に実施した洗浄テストで、洗剤での洗浄だけでは匂い残りが発生していたため、業務用食洗機での洗浄前に重曹に漬けおくオペレーションを追加した。これにより、本番では匂い残りすることなく洗浄することができた。今後の展開に向けて、匂い残りしやすい食品、飲料を入れた場合は洗浄前処理が重要であることが確認できた。

最後に、容器の洗いやすきはサービスを拡大していくにあたって非常に大きなポイントとなる。今回使用したリユースカップはフタ部分が3つに分解が必要な構造になっており、洗浄時に余分な手間が発生してしまっていた(図10)。容器の構造をシンプルにしていくことで、洗浄プロセスを効率的にすることができるだけでなく、洗浄においても洗い残しやカビの原因となる水滴残りを抑制することができると考えている。

図10：パーツ分解後のリユースカップ



3. ユーザアンケート

「日常利用」の2ケースについて、実証終了後にLINEを通じてアンケートを実施、サービスに関する調査を行った。75名のうち11名から回答を得た。

Q1. LINE を使った容器を借りる手続きに面倒さを感じたか

| | かなり簡単だった | 簡単だった | 簡単さも面倒さも特に感じなかった | 面倒だった | かなり面倒だった |
|-----|----------|-------|------------------|-------|----------|
| 回答数 | 3 | 2 | 5 | 1 | 0 |

| | |
|------------------|---|
| かなり簡単だった | 特に難しい操作がなかったため。 |
| 簡単だった | 店員さんに丁寧に教えていただいた |
| 簡単さも面倒さも特に感じなかった | 初回手続きに少し手間取ったが次回からは大丈夫そうだったと思ったので 返却は楽だがLINEを立ち上げるのが面倒くさい。 |

面倒と回答したユーザは少数だが、自由回答でも返却と比較して、面倒さを感じている声が上がっている。

Q2. 容器の返却手続きに面倒さを感じたか

| | かなり簡単だった | 簡単だった | 簡単さも面倒さも特に感じなかった | 面倒だった | かなり面倒だった |
|-----|----------|-------|------------------|-------|----------|
| 回答数 | 7 | 3 | 1 | 0 | 0 |

| | |
|----------|-----------------------------|
| かなり簡単だった | 各フロアに回収ボックスがあったので |
| | 返却時に何もしなくていいので |
| | 容器を返却するだけだったため。 |
| 簡単だった | 執務フロアのエレベーターホールに返却BOXがあったので |
| | 身近に返却先がたくさんあるため |
| | 返却手続きの際に端末での操作が不要となったため |

返却手続きについては多くのユーザが簡単だったと回答した。返却場所が身近にあること、返却時に手続きが必要ないことに簡便さを感じていることが分かる。

Q3. 容器を借りた時に表示される「使い捨て容器削減回数」(図 11)を確認しましたか

図 11：使い捨て容器削減回数



| | 確認した | 確認しなかった |
|-----|------|---------|
| 回答数 | 8 | 3 |

| | |
|---------|--------------------------------|
| 確認した | 貢献している事を実感した |
| | 今後さらに利用が拡大したときのことを想像してワクワクした |
| | 削減結果が目に見えて分かり、モチベーションに繋がった |
| | 特に何も感じなかった |
| 確認しなかった | 特に感じなかった。このレベルで環境対応しているとは思わない。 |
| | 特に理由はない |

大半のユーザが使い捨て容器削減回数を認識していることが分かった。削減回数に環境貢献を感じている回答がある一方、数字の規模感が小さいこともあり環境貢献をそれほど感じていないユーザも存在した。今後は、個人や全体で削減回数が一定回数に達した場合にメッセージを配信するなどのアプローチをとることでより環境貢献を感じてもらえるようなコミュニケーションが考えられる。

4. ユーザインタビュー

「日常利用」×「食事需要」の実証でリユース容器を利用したユーザを6名集め、座談会形式でのインタビューを実施した。「サービスを利用しての感想」と「今後のサービスに期待すること」をテーマに意見を聞いた。

ユーザインタビュー参加者の性別年齢、普段の環境意識

| | |
|--------------|---|
| Aさん 30代男性 | 職場では総務担当なのでオフィスの電力消費を気にしている 時間があるときは自宅でコーヒーを淹れて持ってきている |
| Bさん 20代女性 | マイボトル、マイ箸を普段から持ち歩いている 学生時代に授業で環境問題に触れていた |
| Cさん 20代女性 | マイボトルを大学生から利用。マイボトル割引をよく探す レジ袋はごみをまとめる用に購入してしまうことがある |
| Dさん 20代女性 | マイボトルは環境に良いと思うが、アクション出来ていない 商品を選ぶときには環境に良いものを選ぶようにしている |
| Eさん 20代男性 | 普段環境を意識した行動はあまりできていない コンビニで買い物するときにCさん同様レジ袋購入する |
| Fさん 30代男性 | 仕事で有機農業に関わっていたことがある 普段口にするものは体に良いものを意識して購入している |

テーマ1：リユース容器を使用してみたの感想

- 返却の時に何もしなくてよいのは非常に楽(Aさん)
- LINEでコードが読み取れないことがあり、購入時に手間取った(Bさん)
- ごみが出ず環境に良いので、嬉しい気持ちで食べることができた(Cさん)
- 使い捨て容器の削減回数が可視化できるのもよかった(Cさん)
- LINEでの操作は特に煩わしさは感じなかった(Eさん)
- 環境への意識を高めるには問題に触れる機会が必要、このサービスはきっかけになると思った(Fさん)
- サービスが盛り上がって、利用者のコミュニティでゴミ拾いのようなイベントができると面白い(Fさん)

テーマ2：今後のサービスに期待すること

- お弁当という利用シーンを考えると、中身のラインナップが重要(Aさん)
- リユース容器だけでなく、売れ残りが出ない工夫も必要(Aさん)
- 環境負荷の軽減がもっと可視化されると面白く感じる(Bさん)
- Aさんと同様に売れ残りが出ない工夫が必要だと思った。お弁当の場合は予約制でもよいのではないかと(Cさん)
- お弁当以外のリユース容器、リユースカップは使ってみたいと思う。保温性や結露しないことがポイントだと思う。(Dさん)
- 倒したり、傾けたりした時に中身がこぼれない容器だと嬉しい。オフィスだとパソコンが手元にあるのでこぼして壊れる恐れがある。(Eさん)
- 自分で洗うのは面倒なので、手間がないサービスであってほしい。(Eさん)

- ユーザがハマる仕掛けが欲しい。ポイントが貯まる、ロコミが波及していくような工夫が必要だと思う。(Fさん)
- 子どもと一緒に続けられるようなゲーム要素があると面白いと思う。(Fさん)

6. まとめ

今回の実証では、特に重視していた「返却率」の指標について、「日常利用」の場面で100%を達成することができた。前章でも触れたが「オフィス」という閉鎖空間でサービス提供することで、容器が外に持ち出される可能性を下げることができた。さらに執務フロアで返却できる利便性を提供したり、容器の返却の際にスマホなどでの返却操作を不要としたりしたことで、ユーザの手間を無くし、従来「捨てて」いた行為を「返す」行為に変換することができたのも返却率100%達成に寄与したと考えている。

運用面の検証では、返却ボックスのデザイン、洗浄しやすい容器デザインといった、デザイン面での改善が必要であることを明らかにすることができた。特にリユースカップについては、オフィスでの提供に限定すれば、移動距離も大きくないことから、フタ自体が不要であったり、パッキンを使ったフタでカップの密閉性を高めるよりは、最低限の密閉性を担保するようなフタで洗浄しやすいデザインにしていたりといった工夫が望ましいと感じた。

また、「日常利用、イベント利用」、「食事、ドリンク」の全ての組み合わせに関して実証を実施できたことで、それぞれのケースでリユース容器サービスを提供するにあたっての注意すべきポイントを洗い出すことができた。

7. 今後に向けて

本実証によって、リユース容器を活用した資源循環の実現に向けた可能性を示すことができたが、一方でアンケートやインタビューを通じて消費者の意識や行動が一足飛びに資源循環に向かうわけではなく、時間がかかることも感じた。

そんな環境下で少しでも早く、リユース容器活用による使い捨て容器削減の取り組みを拡大させていくには以下の観点が重要であると考えた。

- 集中的に大規模な容器需要が存在する場面に対応していくこと
- 利用者(=消費者)に極力手間を発生させず、リユース容器の価値を感じてもらい、そこから資源循環への意識づけを行うこと

この二点を念頭に、リユース容器事業の本格展開を検討していく。